

ベルクソンにおける通信メディアモデルの感性論

金子智太郎

序論

身体とメディアのアナロジーはメディア論の祖とされるマーシャル・マクルーハン(Marshall McLuhan)の理論の基礎のひとつだった。マクルーハンは彼が電気メディアと呼んだ装置、つまり電信、電話、ラジオ、テレビなどを身体の神経系の延長とみなしていた¹。近年でも、インターネットと神経系、小型化するコンピュータと身体の補綴など、メディアと身体の比較は更新され続けている²。

一方、フリードリヒ・キットラー(Friedrich Kittler)は電気メディアの誕生期に早くも身体とのアナロジーが論じられていたことを指摘した³。トーマス・エジソンがフォノグラフ(蓄音機)を開発した3年後の1880年、ジャン=マリー・ギュイヨー(Jean-Marie Guyau)が脳とフォノグラフを比較する論文「記憶とフォノグラフ」を執筆している。キットラーはこの論文をフォノグラフの最初の理論とみなした。

ギュイヨーは脳とフォノグラフをどう比較したのか。まず、彼は脳を電気メディア以前の装置とのアナロジーによって説明する既存の理論を批判した。ハーバート・スペンサー(Herbert Spencer)は脳を自動ピアノと、イポリット・テーヌ(Hippolyte Taine)は印刷所と比較した⁴。前者は脳の中に蓄積された記憶を自動ピアノのピアノロール(作動情報を記録した紙製ロール)に、想起された記憶を楽音に喩えている。後者は活版と印刷物がこれに当たる。ギュイヨーはこれらのモデルに含まれる鍵盤と活字という、あらかじめ固定された要素が脳にふさわしくないと考えた。そして、彼は脳のより柔軟なモデルを求めて、フォノグラフこそがふさわしいと主張した。

ごく簡略化すると、フォノグラフは振動板、針、金属板からなる。音が振動板を震わせると、その振動が針に伝えられ、針は金属板に溝を残して音を記録する。反対に、針が金属板の溝を通ると、針の震えが振動板に伝わって音を再生する。ギュイヨーは脳がこれらフォノグラフの三つの構成要素を兼ねていると考えた⁵。彼によれば、脳細胞は音に反応して振動する。このとき、針が金属板に溝を刻むように、振動する脳細胞が神経の流れの「川床(lits)」を形成する。後に神経の流れがこの川床を通過すると、川床を形成する細胞が振動し、記憶が想起される。

ギュイヨーは脳とフォノグラフの類似をこのように説明した。また、彼は両者の違いも指摘している。振動しかないフォノグラフとは違い、脳はこの振動を絶えず意識に翻訳している。そのため、彼は脳を「意識のあるフォノグラフ」と呼んだ⁶。

キットラーは19世紀末に脳とフォノグラフのアナロジーがいかに普及していたかを強調する。当時の脳研究者や芸術生理学者は脳のフォノグラフモデルを共有していたという⁷。また、彼はジグムント・フロイト(Sigmund Freud)の有名な「マジック・メモ」もほとんど同じモデルと考えている⁸。フロイトは彼の言葉でいう「心的装置」を当時販売されていたこの文房具と比較した⁹。マジック・メモは樹脂製のボードと、パラフィン紙に透明セルロイドを重ねたカバーシートからなる。カバーシートを破らない程度に尖ったものでセルロイドの表面をひっかくと、ボードが凹んで線が残る。カバーシートをめくってまた重ねると線が消える。こうすることで何度も書き直せるのである。ボードには線の痕跡が残り、カバーシートからは消えるため、フロイトは前者を記憶装置、後者を知覚装置のアナロジーとした。しかし、キットラーはフォノグラフの方がフロイトの心的装置により正確に対応するのではないかと示唆している¹⁰。マジック・メモと違って、フォノグラフは痕跡を再生できるからである。キットラーの議論にしたがえば、19世紀末の脳や精神を研究する学問のほとんどがフォノグラフモデルを採用していたことになる。

このような時代に、アンリ・ベルクソン(Henri Bergson)は脳とフォノグラフのアナロジーを何度も批判した¹¹。彼はこのモデルが脳の働きを決定的に誤解させてしまうと繰り返し訴えている。注意したいのは、ベルクソンの批判が身体と電気メディアのアナロジー自体に向かうのではないことである。生命の創造性と機械の法則性を対比するというベルクソン哲学の一般的印象から、人は彼が身体と機械のアナロジーにも否定的だったと推測してしまうかもしれない。しかし、ベルクソンはむしろ脳をフォノグラフとは別のメディアに喩えている。さらに脳だけでなく、主体のさまざまな面を電気メディアとのアナロジーで説明した。彼がモデルとして選んだのは電話、電信、ラジオだった。本論文ではフォノグラフと対比して、これらの電気メディアを

通信メディアと呼びたい。19世紀末に流行した脳の記録メディアモデルに対抗して、ベルクソンは主体の通信メディアモデルを採用したと言えるのではないか。

以上のような推測にもとづいて、本論文はベルクソンによる主体と通信メディアのアナロジーを詳細に考察する。そして、三つの通信メディアモデルがどのような主体のあり方を示すのか、記録メディアモデルと対比しながら明らかにしたい。普及した記録メディアモデルとは異なり、主体と通信メディアのアナロジーを直感的に理解するのは難しいかもしれない。なぜなら、ベルクソンはこのアナロジーを使って主体のコミュニケーションではなく、主体の知覚と記憶の関係を説明しようとしたからである。ギュイヨーがフォノグラフを参照してこの関係を説明したように。このことを明確に示すため、知覚と記憶の関係を一語で言いかえて、ベルクソンにとってもギュイヨーにとっても、電気メディアモデルは主体の感性のモデルであると言うことにしよう。通信メディアモデルが難解なもうひとつの理由は、電話モデル、電信モデル、ラジオモデルがそれぞれ感性の異なる面を説明するからだろう。三つのモデルを組み合わせることで、ベルクソンが考える主体の感性のあり方が浮かび上がるのではないか。

ベルクソン哲学における感性の通信メディアモデルを理解することは、主に次の三つの研究に貢献できるはずだ。ひとつは19世紀メディア理論研究に対して、主体の記録メディアモデルと通信メディアモデルの対立という論点を提示できる。この時代のメディアが文化に与えた影響を強調するマクルーハンやキットラー、またはジョナサン・クレーリー(Jonathan Crary)らは特にこの対立に言及していない。次に、ベルクソンの思想にもとづく芸術論の研究に対して、彼の感性論と通信メディアの結びつきを再考するよう促せる。ベルクソンの哲学とメディアの関係を考察した芸術論には、例えばジル・ドゥルーズ(Gilles Deleuze)の『シネマ』(1983, 85)や、ビデオ・アートを論じたマーク・B・N・ハンセン(Mark B. N. Hansen)の『新しいメディアのための新しい哲学』(2004)がある。これらの研究に対して、一般的には記録メディアと呼ばれる映画やビデオと、通信メディアをモデルとするベルクソン感性論がどう結びつくのかと問うことができる。最後に、三つの通信メディアはどれもいわば聴覚メディアであることから、ベルクソン哲学と聴覚の関係を考察する研究にも貢献できるだろう。

本論文は四節からなる。第一節ではまず、ウラジミール・ジャンケレヴィッチ(Vladimir Jankélévitch)の考察を参考し、ギュイヨーとベルクソンの思想を比較する。また、

ギュイヨーの思想における脳のフォノグラフモデルの意義も理解しておく。第二節から第四節までは、ベルクソンの個々の通信メディアモデルについて論じる。あらかじめ述べておくと、三つの通信メディアは感性、つまり知覚と記憶の関係を説明するだけでなく、主体と客体、精神と物質の関係も表現している。そこで、これらの問題を中心的に論じたベルクソンの第二主著『物質と記憶』(1896)の議論を参照しながら、第二節は電話モデル、第三節は電信モデル、第四節はラジオモデルについて論じていくことになる。このような議論によって、通信メディアモデルの一般的な特徴や、それぞれの相違点、さらに記憶メディアモデルとの詳細な比較が導かれるだろう。

第一節 ギュイヨーの時間論とフォノグラフモデル

本節ではまずジャンケレヴィッチの論文「二人の生の哲学者—ベルクソンとギュイヨー」(1924)を参照しながら、ベルクソンとギュイヨーの思想の共通点、相違点を検討する。ここで注目するのは両者の時間論である。ギュイヨーが時間を考察した『時間の観念の発生』(1890)には、ベルクソンが書評を書いている¹²。また、同著はキットラーが紹介した「記憶とフォノグラフ」を収録している。そこで、同著にもとづいてギュイヨーの時間論と脳のフォノグラフモデルの関係を考えておきたい。

内容に入る前に、『時間の観念の発生』の特異な出版の経緯を確認しておこう。「記憶とフォノグラフ」は1880年に『哲学評論(*Revue philosophique de France et de l'étranger*)』に掲載された後、同著の一節となった。同著は1888年に33歳で急逝したギュイヨーの遺稿を彼の母親の再婚相手である哲学者、アルフレッド・フイエ(Alfred Fouillée)が編集したものである。ジャンケレヴィッチはベルクソンとギュイヨーの精神論や時間論を比較するために主に同著を参考した。彼はそのなかで同著の一部にフイエが加筆したかもしれないと推測している¹³。しかも、フイエは1889年に出版されたベルクソンの第一主著『意識に直接与えられたものについての試論』を参照したかもしれないという。しかし、ジャンケレヴィッチはこうした推測をふまえて、たとえフイエがギュイヨーを部分的にベルクソン化したとしても、ギュイヨーとベルクソンの相違点は明確だと判断している。そこで、本論文も彼の判断にしたがい、両者の共通点はフイエの影響を勘案しながら、相違点により注目していく。

まず、ベルクソンの書評とジャンケレヴィッチの考察を参考に、『時間の観念の発生』の要点を簡潔にまとめてお

こう。ギュイヨーが主体の意識の状態としてまず想定したのは「原始的混乱」の状態、現在の知覚と過去の記憶が混じり合い、いかなる「遠近感」もない状態である¹⁴。動物や幼児はこの状態に置かれているという。ギュイヨーはこの状態に時間の観念がつけ加わると、初めて知覚と記憶に秩序がもたらされると考えた。このとき、彼は時間の観念に「受動的形式」と「能動的根底」を区別する¹⁵。前者は意識の諸状態が並べられ、秩序づけられる抽象的な枠組み、「遠近感」としての時間である。ギュイヨーはこの枠組みが空間をもとにつくられると指摘する。つまり、主体は意識の諸状態を「一列の空間的イメージ」に並べることで、初めて時間的前後関係を整理できると彼は考えた¹⁶。一方、もうひとつの時間の観念、能動的根底とは意識の原始的混乱の内に時間的前後の元になる差異をつくりだす原動力である。ギュイヨーは主体の「志向(intention)」がこの能動的根底に他ならないと主張した。

原始的意識のなかで、時間の諸瞬間のこのような区別がどのようにして起こるのか。——私の考えでは、被ること(pâtir)と働きかけること(agir)の区別によって時間の区別が生まれるのである。苦痛を被り、これを遠ざけようと反対に働きかけるとき、人は時間を現在と未来の二つに分割し始める。快感と苦痛に対するこの反応が意識されると志向になる。また、私の考えでは、空間と時間の観念を一度に生みだすのは、自発的なものであれ、反省されたものであれ、この志向に他ならない¹⁷。

ギュイヨーはこの志向が空間の起源でもあると考えた。志向から方向が生まれ、方向から延長が生じるからである¹⁸。つまり、志向によって時間的分割と空間的方向がつくれられ、さらに両者が結びついて時間の受動的形式がつくれられる。

それでは、ギュイヨーとベルクソンの時間論の共通点、相違点はどこにあるのか。時間の抽象的な枠組みは空間を元にするという主張は、ベルクソンの『意識に直接与えられたものについての試論』の主旨のひとつである。ジャンケレヴィッチはフイエの加筆を勘案しながら、ギュイヨーがベルクソンに先駆けてこのように主張したことを探査した。さらに、ギュイヨーとベルクソンは時間の抽象的な枠組みと具体的な根底の区別においても一致する。ベルクソンは時間の具体的な根底を「持続(durée)」と呼んでいる。しかし、この根底をどう理解するかにおいて両者は異なるとジャンケレヴィッチは判断した¹⁹。彼の解釈では、ギュイヨーが考える時間の根底である志向とは、

メーヌ・ド・ビラン(Maine de Biran)が努力の感情と呼んだものと同じである。これは空間のなかでの運動を引き起こす「筋肉的(musclé)」なもので、したがって結局は空間的なものである。一方、後に詳しく論じるが、ベルクソンにとっての時間の根底である持続は純粹に時間的である。このように、ジャンケレヴィッチは両者が根本的には相容れないと考えた。

さて、『時間の観念の発生』におけるギュイヨーの時間論は、序論で紹介した「記憶とフォノグラフ」の議論とどう関わるのか。実は、主に意識のあり方をあつかう同著のなかで、「記憶とフォノグラフ」の身体論は全体から浮いているように見える。というのも、ギュイヨーは意識と身体の関係をあまり考察していないからである。しかし、フォノグラフモデルで説明される脳の働きと、先に見てきた意識のあり方には明確な対応が見られる。まず、意識の原始的混乱を前提し、所与の枠組みをみとめないという理論は、脳の自動ピアノモデルや印刷所モデルに対する批判に対応する。また、特に注目したいのは「川床」という概念である。序論で見たように、ギュイヨーは脳細胞が振動すると脳内に神経が流れる川床が形成されると論じた。そして、この川床をフォノグラフの金属板に刻まれる溝になぞらえていた。一方、彼は時間論において、時間の受動的形式、抽象的枠組みのことも川床と呼んでいた。つまり、原始的混乱に時間の受動的形式を与えて意識の状態に秩序をもたらすこと、柔軟な脳細胞に神経の流れる川床を形成すること、さらに金属板に溝を刻むことが対応しているのである。

以上の理由から、ギュイヨーのフォノグラフモデルは脳だけでなく意識にも適用できると考えられる。時間の受動的形式はフォノグラフの金属板に刻まれた溝に対応する。このアナロジーをさらに拡張してみよう。意識の状態に差異をつくりだすのは時間の能動的根底である志向だった。外部からの音がフォノグラフの振動板と針を震わせる。いわば、この振動はいまだ原始的混乱の状態にある。振動に方向をつけて、金属板に差異として残すには金属板を回転させる必要がある。また、針に溝をたどり直させて、音を再生するにも回転が必要である。そこで、フォノグラフにおけるこの回転の動力こそが、意識における志向に対応すると推測できる。

第二節 身体の電話モデル

ここからは、ベルクソン哲学における主体と通信メディアのアナロジーを見ていこう。序論で述べたとおり、彼は

脳とフォノグラフの比較を強く批判する一方で、電話、電信、ラジオという通信メディアを主体のモデルに選んだ。これらのモデルは主体のあり方をどう表現するのか。個々のメディアの考察に入る前に、序論の繰り返しになるが、本節以降の概要と私の解釈をまず提示しておきたい。三つの通信モデルはベルクソン哲学における感性、つまり知覚と記憶の関係の三つの面を表現している。さらに、三つの通信モデルはベルクソン哲学における客体と主体、物質と精神の関係の三つの面も表現していると考えられる。電話モデルは物質である身体が他の物質からどう区別され、精神とどう結びつくのかを表現している。電信モデルは持続としての精神のあり方を表現している。ラジオモデルは物質と精神の結合を表現している。そこで、ここからは『物質と記憶』を中心に物質と精神、知覚と記憶に関する議論をまとめながら、個々のメディアがベルクソンの理論をどのように説明しているのかを見ていこう。最終的に、ベルクソン哲学における通信メディアモデルの特徴をまとめ、ギュイヨーの記録メディアモデルと対比しよう。

物質と精神の関係は『物質と記憶』の主題と言つていいだろう。そして、ベルクソンが同著で提示した原理は両者の「空間的区別」を「時間的区別」に置きかえるというものだった²⁰。彼によれば、伝統的に物質と精神は空間的に区別されてきた。つまり、知覚は物質と別の場所にあり、例えば脳の内部や、物質とは異なる世界にあるとみなされてきた。しかし、ベルクソンは両者が同時に同じ場所にあると主張する。知覚は脳の内部ではなく、身体を越えて、身体の周囲に拡がっているという。彼の有名な、物質でも知覚でもある「イメージ(image)」の概念はこのような空間的区別の否定を表現している。では、物質と知覚はどう区別されるのか。『物質と記憶』第一章ではひとまず、両者は同じ場所で、別の「システム」に属するとされる²¹。物質システムには中心がなく、すべてのイメージが自然法則にしたがい相互作用する。一方、知覚システムではすべてのイメージが身体という中心にしたがって変化する。この変化には法則が適用できない。このような二つのシステムがイメージに共存しているのである。そして、この二つのシステムの区別が時間的とみなされるのだが、これについては後に本論文第四節で説明しよう。

『物質と記憶』第一章は以上のような空間的区別の批判から身体論に向かう。物質と精神の空間的区別を否定したとき、身体のあり方はどう理解されるのか。ベルクソンによれば、物質と知覚の空間的区別を前提すると、身体は物質的刺激にもとづいて物質とは別の場所に知覚を

つくっていることになる。しかし、ベルクソンは感覚器官や脳が知覚をつくるという仮説は証明できないと主張し、このことを物質と精神の空間的区別を批判する論拠のひとつとした²²。一方、物質と知覚が同じ場所にあるなら、身体の役割は知覚をつくることではなく、知覚システムに入ることになる。ベルクソンの考えでは、身体というイメージが特権的な理由は、物質システムを脱して知覚システムを受け容れるからである。

ベルクソンは神経系の構造を参照し、なぜ身体が物質システムを離脱できるのかを説明した²³。すべての物質は周囲の物質から常に作用を受け、反作用を返す。この相互作用は自然法則にしたがい、物質システムに属している。身体もまた、すべての部分があらゆる物質から刺激を受けている。しかし、一部の刺激だけは感覚器官を通じて脳に伝達され、この刺激に対しては反作用が返されないこともある。言いかえれば、身体は一部の刺激に対して即座に反応せず、待つことができる。身体にはなぜ、このような特権があるのか。ベルクソンによれば、脳には刺激を無数に分割して解消する機能があり、そのために身体は物質的相互作用の流れを制止できるのである²⁴。つまり、この機能によって身体は物質システムを抜け出すことができる。

物質システムを脱出した身体は知覚システムに移行する。ベルクソンはこの移行を記憶と関係づけた。『物質と記憶』第一章後半の議論を確認していこう。ベルクソンによれば、物質的刺激に対する身体の反応が制止されたとき、身体は記憶を受け入れることができる²⁵。記憶が想起されて知覚になることで、身体は機械的に反射を返すのではなく、過去を参照して行動できるようになる。物質的刺激に対する反応は自然法則にしたがうが、過去にもとづく行動は一般化できず、法則が立てられない²⁶。したがって、記憶を受け入れることは、身体が自分を中心として不確定に変化するシステムをつくりだすこと、つまり知覚システムをつくることになるのである。反対に、物質は記憶を持たないとされる²⁷。この記憶の有無は先に言及した物質と精神の時間的区別につながっていく。

物質の流れを制止して、記憶の流れを受け容れる、このような脳の働きをベルクソンは「中央電話局」に喩えた。

はつきりとわかっていることは、皮質のいわゆる感覚性をもつ多様なシステムの細胞、つまり求心性神経の末端の分枝とローランド溝の運動性細胞との間にある細胞のおかげで、受容された興奮は意図的に脊髄の特

定の運動機構と結びつくことができ、こうして結果を選ぶことができるということである。[中略]だから、私達の考えでは脳とは一種の中央電話局に他ならないはずである。その役割は「通信を伝える」こと、または通信を待たせることである。脳は受け取ったものに何もつけ加えない²⁸。

この電話モデルが二人の遠距離にある話者を結びつけるという意味でないことは明らかである。このモデルは二人の送話者と一人の受話者、および交換機からなる。送話者に当たるのが物質と過去、受話者には現在の状態、交換機には脳が対応する。交換機がなければ、受話者は常に物質に接続され、物質によって決定される。しかし、交換機を介することで物質からの送話を待たせ、現在は過去からの送話を記憶として受け入れることができる。

この電話モデルの要点は接続と選択である。電話システムは送られてきた情報を記録も再生もできない。どの送話者を受話者と結びつけるか、接続の選択をするだけである。結論でもう一度まとめるが、ベルクソンの電話モデルとギュイヨーのフォノグラフモデルの相違点をいくつか指摘しておこう。まず、両者は脳の働きだけでなく記憶の場所が大きく異なる。フォノグラフモデルでは記録が金属板の溝として装置の内部に保存されるが、電話モデルの送話者は装置の内部には存在しない。さらに、フォノグラフモデルでは振動をもとに記録をつくるという過程になるが、電話モデルでは過去に対応する送話者から現在に対応する受話者へという反対の過程になる。このような対比の詳細は、次節でベルクソンの記憶論を参照することで、さらに明確になるだろう。

第三節 記憶の電信モデル

本節はベルクソンの記憶論における電信のアナロジーを考察する。『物質と記憶』第二、第三章で展開された記憶論は、脳のフォノグラフモデルに対する抵抗だったと言つてもいいだろう。ベルクソンは同著ではこのモデルに言及しなかつたが、後に記憶論を簡潔に説明するとき、このモデルを繰り返し批判した。最も詳細な「変化の知覚」(1911)での批判は次のとおりである²⁹。記憶がフォノグラフの溝のように物質的に保存されるなら、この溝はきわめて膨大になるはずだ。膨大な記録は何の役に立つか。そのなかから有用な記憶をどうやって選択するのか。また、脳の損傷から生じる記憶喪失が突然回復する症例

をどう説明するのか。そもそも、知覚は絶えず消滅すると前提されているのに脳はなぜ存在し続けるのか。これらの問題は主に『物質と記憶』第二、第三章で検討されている。このような問題提起を経て、ベルクソンは自らの記憶論を提示した。このとき記憶のモデルに使われたメディアが電信である。電信が記憶のモデルになるのはなぜなのか。まず、彼の記憶論を整理していこう。

記憶を物質的記録とみなす解釈を否定したベルクソンは、記憶をどう理解したのか。『物質と記憶』第三章における彼の説明は発想の転換を要求している。人は知覚が瞬間ごとに消滅し、同時に記憶として脳に保存されると思いがちである。そして、脳はこの保存されたものを知覚として再生できると考える。しかし、前節で見たようにベルクソンは脳の働きを接続と選択に限定した。そして、彼は記憶がそれ自体で残存して、自発的に知覚になると主張する³⁰。なぜなら、私達の感性においては過去と現在が連続していて、現在は瞬間ごとに消え去らず、過去が現在に延びていくからである³¹。このような過去と現在の連続が「持続」と呼ばれている。ベルクソンは知覚と物質を別のシステムとみなしたが、知覚システムでは過去と現在が連続しているのである。そのため、脳が記憶を受け入れることが、知覚システムに属することになるのだ。記憶の保存と再生という一般的な理解を、ベルクソンは持続に置きかえる。そのため、ベルクソンが記憶の保存や再生を語るときは、それ自体で残存するとか、自発的に再生するという一見理解しがたい表現になるのだろう。

以上のような記憶のあり方を表現しているのが記憶の電信モデルである。このモデルはベルクソンが『物質と記憶』第二章で記憶の働きを「注意」という機能から論じたときに用いられた³²。注意力を高めて明確な知覚や記憶を得るという活動は、一般的に「知的状態の増大」や「精神の集中」として説明されることが多い。しかし、これらの概念は曖昧なため、「脳のエネルギーの特殊な緊張」と解釈されるようになる³³。これらの仮説に対して、ベルクソンは注意を記憶自体の働きとして説明する。記憶が自発的に知覚となり、知覚をより豊かにしていく活動とみなすのである。

こうして、私たちの記憶は新たに現在の知覚を創造する。[中略]したがって、精神が何か一定の光を用いて、周囲に放射したり、一点に集中したりするとはもはや考えられない。同じく比喩を用いて言うとすれば、私達はむしろ注意の基礎的な作業を電信技師の作業に比較する方がよいと考える。電信技師は重要な通報を

受け取ると、正誤を検査するために、発信元に一語一語問い合わせる³⁴。

記憶が知覚を新しくする持続のあり方が、電信技師と通報の発信元のやり取りに喩えられている。このモデルも電話モデルと同じく、遠く離れた話者を結びつけるという意味ではまったくない。電信技師に当たるのが過去、発信元が現在であり、発信元が通信を更新すると、電信技師は通信を発信元に送り返すことで確認する。こうして、発信元と電信技師の間には「回路(circuit)」がつくられる。ベルクソンはこのような回路状の接続が主体の過去と現在の間にもあると主張している³⁵。知覚が変化すると、記憶はそれに応じて新しい知覚を提供する。こうした知覚と記憶の回路が螺旋状に進展することで、持続には予測できない新しい状態が常につくられる。

したがって、電信モデルの要点も電話モデルと同じく接続と選択である。二つのモデルの相違点はまず、この接続は回路であることが電信モデルでは明らかになっている。次に、選択が過去における、現在の知覚に対応した記憶の選択を意味している。前節で述べたとおり、電話、電信モデルはどちらも知覚と記憶の関係を表現しているが、表現される面が異なるのである。

第四節 持続のラジオモデル

電話、電信モデルに統いて、本節は主体のラジオモデルについて考察する。先の二つのモデルはもっぱら主体が客体から、精神が物質からどのように区別されるのかを表現していたが、この第三のモデルは両者の結合を表現していると言えるだろう。そのため、このモデルには特筆すべき意義がある。主体と客体の結合について、ベルクソンが初めて論じたのは『物質と記憶』第四章である。そこで、まず同章の議論をまとめ、ラジオモデルがこの結合をどう表現しているか確認していく。

最初に、本論文第二節で言及した主体と客体、精神と物質の時間的区別について理解しておきたい。ベルクソンは『物質と記憶』第一章で両者を空間的にではなく、時間的に区別することを提唱した。この時間的区別とは時間的前後の区別ではなく(ギュイヨーと同じく、ベルクソンも時間的前後の区別は時間に混入された空間的区別であると考える)、さしあたり記憶の有無として理解される。第二節でも言及したように、知覚システムは記憶を受け入れるのに対して、物質システムは記憶を欠いている。言いかえれば、前者は持続するのに対して、後者は持続

しない。記憶がない、持続しないとは過去と現在、先行する状態と現在の状態が連続しないということだ。ベルクソンによれば、物質の時間は非連続的である。物質に自然法則が適用できるのは、任意の瞬間の状態を孤立させても構わないからである³⁶。物質の状態がA、B、Cと変化するとき、AからBの変化にもとづいてBからCの変化を予測できるのは、BからCの変化とAやA以前の状態が無関係だからである。一方、知覚の状態は常に先行する状態、つまり記憶を受け入れる。例えば、同じ状態が長く連続したという理由だけで知覚は変化してしまう³⁷。したがって、ベルクソンが考える主体と客体、物質と精神の時間的区別は、時間的非連続と連続の区別と言いかえることができる。

ベルクソンはさらに議論を進めていく。時間的区別のある二つのシステムがなぜイメージに共存できるのか。ベルクソンはその理由として、時間的区別が空間的区別と異なり「段階(degré)」を許容するからだと考えた³⁸。物質システムと知覚システムが空間的に異なる場所にあるなら、両者は非連続で段階が存在しない。しかし、過去と現在がどのくらい連続しているかには段階が設けられる。そこで、ベルクソンは過去と現在が緊密に結びつくシステムもあれば、ほとんど結びつかないシステムもあり、中間の段階が無数にあると想定した³⁹。さらに、彼は物質システムをまったくの非連続ではなく、極限まで過去と現在の連続が弛緩していると再解釈した。これに応じて、精神はある程度、緊密に連続したシステムとされる。こうして、ベルクソンは『物質と記憶』第四章において物質と精神の二元論から持続の一元論に移行する。持続には無数の連続の段階、つまり「緊張度(tension)」のグラデーションがあり、すべての段階が共存しているのである。

ここで、再び身体論に戻ろう。ベルクソンが考える身体の機能は物質的・機械的反射を妨げ、記憶・持続を受け入れることだった。持続の一元論が提示された後では、身体が受け入れたのは持続の無数の緊張度のひとつということになる。そして、ベルクソンは第三主著『創造的進化』(1907)では生物種の区別と持続の緊張度の対応を議論していった。

ベルクソンは以上のような持続の一元論における身体の働きをラジオとのアナロジーで説明する。

私がこの瞬間に机の上でのものを書いている場合、もし私の知覚、したがって私の行動が、机の物質性を構成する原子、または現象が対応する量に適合するならば、机はどうなるのか。私の行動は解消してしまい、私の知

覚は私が私に見えている場所と時間に、無限な宇宙と、それに劣らず無限な歴史を含むことになる。このとき、私にはなぜこの無限なものが、私が行動するためには、不動で固定された何でもない長方形になるのかということを理解するのは不可能になる。[中略]別の選択に対応する別の世界がいくつも、同じ場所、および同じ時間に、この世界とともに実在してもまったく問題がない。ちょうど、多くの異なる放送局が同時に多くの異なるコンサートを放送し、どのコンサートも他局の音楽に音を混ぜず、それぞれのコンサートがひとつの放送局の波長を選んで受ける受信機によって、完全に、またそれだけ聞かれながら、同時に存在しているようなものである⁴⁰。

引用の前半で語られているのは、知覚システムから物質システムへの移行というifikションである。前者は机として現れていたものが、後者では境界のない流動する原子のなかに解消してしまう。このように複数のシステムが同時に同じ場所に存在しているということを、ベルクソンは『物質と記憶』第一章で主張していた。

引用後半でベルクソンはこの複数のシステムをラジオ放送に、身体をラジオ受信機に喩える。ラジオ放送には無数の周波数の局が共存している。受信機はそのひとつだけを選択し、電波を音に変換する。したがって、このラジオモデルでも選択と接続が要点になっている。選択は無数の周波数からの選択であり、接続は電波と音の接続である。そして、周波数の選択は持続の緊張度の選択、電波と音は過去と現在に対応している。このモデルは基本的にひとつのラジオがひとつの放送局だけを受信する。しかし、別の局の放送を受信するラジオが無数にあることも示唆されている。

結論

本論文は19世紀末の電気メディアの誕生とともに提起された主体の電気メディアモデルを考察してきた。ギュイヨーによる脳のフォノグラフモデルは当時から多くの学問に普及していった。しかし、ベルクソンはこの記録メディアモデルを批判し、代わりに電話、電信、ラジオといった主体の通信メディアモデルを提起した。この結論ではギュイヨーの記録メディアモデルとベルクソンの通信メディアモデルの比較としてこれまでの議論をまとめたい。

第一節では、ギュイヨーとベルクソンの時間論を比較するとともに、ギュイヨーの時間論と脳のフォノグラフモデ

ルの対応も確認した。両者の時間論の共通点は、時間の抽象的枠組みと具体的根底を区別し、前者は後者が空間と結びついでつくられると考えたことだった。抽象的枠組みは所与ではなく、つくられたものだという発想はスペンサーヤやテーヌによる脳の電気以前のメディアモデルには見られない。つまり、ギュイヨーとベルクソンに共通する電気メディアモデルの特徴と言えるだろう。ギュイヨーが時間の具体的根底の正体と考えたのは、刺激に反応する主体の志向だった。ジャンケレヴィッヂによれば、ギュイヨーが論じた志向とは空間のなかに運動を引き起こすもので、つまり実は空間的である。そのため、ベルクソンの時間的な主体とは根本的には相容れない。このような彼の時間論は「記憶とフォノグラフ」におけるフォノグラフモデルの脳のあり方と符合している。フォノグラフモデルでこの志向に対応するのは、おそらく金属板を回転させる動力だろう。

第二節から四節までは、主に『物質と記憶』におけるベルクソンの感性論、つまり知覚と記憶の関係の理論を追いかながら、個々の通信モデルの要点を指摘していった。三つの通信モデルの要点はどれも接続と選択という言葉で言いあらわせるが、詳細は異なっている。電話モデルは物質からの刺激を待たせて、過去から記憶を知覚として受け入れるという身体の働きを表現していた。電話は通信に何もつけ加えないが、過去と現在の接続を選択するのである。次に、電信モデルは主体の持続のあり方を電信技師と発信元の回路として表現していた。現在の変化に対して過去は対応する記憶を選択し、知覚として送信する。主体の持続はこのような仕方で螺旋状に進展していく。最後に、ラジオモデルは主体と客体、物質と精神の共存と、そのなかでの身体の働きを表現している。混じり合わずに共存する無数の周波数のように、さまざまな緊張度の持続があり、物質も精神もこのグレーデーションのどこかに位置づけられる。そして、ラジオがひとつの周波数を選んで音に接続するように、身体はこの無数の緊張度のひとつを選択して現在に接続する。

知覚と記憶の関係についての記録メディアモデルの主体と通信メディアモデルの主体の根本的な相違をまとめよう。まず、前者は知覚から記憶をつくるのに対して、後者は記憶から知覚へという過程になる。次に、前者は脳の内部に記憶を保存するのに対して、後者の脳は記憶と知覚の接続を確立するためにある。接続が確立されれば、記憶はそれ自体で残存し、自発的に知覚になる。最後に、記録メディアモデルの知覚は混乱状態とはいえ記憶から独立して与えられるが、通信メディアモデルの主体の知覚

は常に記憶と結びついている。

ベルクソンは以上のような通信メディアモデルの感性論によって、「意識に直接与えられたものについての試論」で提起された持続、流れとしての精神という観念を、文字通り具体化したのである。また、次のようにも結論づけられるだろう。ベルクソンの思想は彼の時代の急速に機械化した社会に対する反動や超越という印象を与えることがある。しかし、少なくとも感性論には彼の時代に生まれ、今まで重要性を失わないテクノロジー的一面との、深い対応関係がみとめられる。

序論で指摘したとおり、通信メディアモデルの考察はベルクソン哲学研究だけでなく、芸術論、メディア論にも意義があると思われるが、本論文ではその概略を示すのみにとどまった。例えば、このモデルとベルクソンの写真、映画モデルとの関係や、現実の通信メディア自体が彼の哲学に与えた影響など、検討すべきことも多い。また、ベルクソンと同時代の他の思想に主体の通信メディアモデルを探すという課題もある。これらは今後の研究課題したい。

註

- 1 Cf. Marshall McLuhan, *Understanding Media: The Extensions of Man*, London: Routledge, 2001, chap.4.
- 2 Cf. William J. Mitchell, *Me++: The Cyborg Self and the Networked City*, Massachusetts: The MIT Press, 2004, chap.2.
- 3 Friedrich A. Kittler, *Gramophone, Film, Typewriter*, Geoffrey Winthrop-Young and Michael Wutz trans., California: Stanford University Press, 1986, p.29.
- 4 Jean-Marie Guyau, *La Genèse de L'idée de Temps*, Charleston: Binlio-Life, 2009, p.50.
- 5 *ibid.*, p.51.
- 6 *ibid.*, p.57.
- 7 Kittler, 1986, p.38.
- 8 *ibid.*, p.38.
- 9 フロイトは『夢判断』(1900)において人間の心を装置と呼ぶことができる理由を説明している。重要なのは「心的局在性 (psychische Lokalität)」の観念であり、これは心を運動する複数の要素(意識、無意識、前意識など)から構成されたものとみなす考え方である。この観念にもとづいて、フロイトは心を機械装置になぞらえた。Cf. フロイト『フロイト著作集第二巻』高橋義孝訳、人文書院、1968年、441頁。
- 10 Kittler, 1986, p.38.
- 11 Henri Bergson, *L'Énergie Spirituelle*, Paris: PUF, 1919(1999), pp.51-52, 73., *La Pensée et le Mouvant*, Paris: PUF, 1934(1998), pp.171-173. ベルクソンの著作の参考頁には発表年と参照したQuadrigé版の発表年を並記する。
- 12 Cf. Henri Bergson, *Mélanges*, André Robinet ed., Paris: PUF, 1972, pp.349-356.
- 13 Vladimir Jankélévitch, *Premières et Dernières Pages*, Paris: Éditions du Seuil, 1994, p.34.
- 14 Guyau, 2009, chap.1.
- 15 *ibid.*, chap. 2, 3.
- 16 *ibid.*, p.11.
- 17 *ibid.*, p.31.
- 18 *ibid.*, p.32.
- 19 Jankélévitch, 1994, pp.40-42.
- 20 Henri Bergson, *Matière et Mémoire*, Paris: PUF, 1896(1997), pp.74, 249. 「主体と客体の関係、および両者の区別と結合に関わる問題は、空間との関係ではなく、時間との関係で提起されなければならない。」
- 21 *ibid.*, pp.20-21. 「どのようにして同じイメージが二つの異なるシステムに同時に入ることができるのか。」
- 22 *ibid.*, p.27. 「つまり、神経系という器官は表象の製造にも、準備にさえも役立たない。」
- 23 *ibid.*, pp.24-27.
- 24 *ibid.*, p.26.
- 25 *ibid.*, p.67. 「したがって、実行される行動の不確定性が純粋な気まぐれと混同されないためには、知覚されたイメージの保存が必要である。」
- 26 Henri Bergson, *Essai sur les Données Immédiates de la Conscience*, Paris: PUF, 1889(1997), chap.3.
- 27 Bergson, 1896(1997), pp.250-251.
- 28 *ibid.*, p.26.
- 29 Bergson, 1934(1998), pp.171-173.
- 30 Bergson, 1896(1997), p.166. ベルクソンは記憶がそれ自体で残存し、自發的に知覚になる働きを「mémoire(記憶力)」と、知覚になる個々の記憶の内容を「souvenir(想い出)」と呼び、区別している。しかし、本論文は簡潔を期すためにこの区別を省略して、「記憶」一語であらわすこととする。
- 31 Cf. 「なぜなら、持続はある瞬間に取って代わられるような瞬間ではないからである。もしそうだとしたら、現在だけが存在し、過去の現在への延長も、進化も、具体的持続も決して存在しないだろう。持続とは未来を侵食し、前進しながらふくらんでいく、過去の連続的な進展である。過去は絶えず増大し続けるから、無制限に自己を保ち続ける。」(Henri Bergson, *L'évolution Créatrice*, Paris: PUF, 1907(1998), p.4.)
- 32 Bergson, 1896(1997), pp. 107-113.
- 33 本論文では省略するが、ギュイヨーも「記憶とフォノグラフ」でこの解釈を論じている。Guyau, 2009, pp.54-56.
- 34 Bergson, 1896(1997), p.111.
- 35 *ibid.*, p.114.
- 36 *ibid.*, p.236. 「現在に、絶えず再開する現在に存在すること。これが物質の根本法則である。ここに必然性が構成される。」
- 37 Bergson, 1907(1998), pp.1-2.
- 38 Bergson, 1896(1997), p.249.
- 39 *ibid.*, p.232.
- 40 Bergson, 1934(1998), pp.62-63.

Aesthetics of “Communication Media Model” in Bergson

KANEKO, Tomotaro

Friedrich Kittler states that an idea that regards phonograph as a model of brain became popular in the late nineteenth century. He introduces Jean-Marie Guyau's thesis, "Memory and phonograph" (1880), as a fore-runner of the analogy. Brain researchers and art physiologists receive well Guyau's theory that compares brain with phonograph which is able to record sounds and play them back. However, although Kittler does not mention it, there were also criticisms against this analogy at the time. Henri Bergson, who writes a review of Guyau's *The Genesis of the Idea of Time* (1890) that includes the above thesis, is a representative critic. He does not criticize the analogy between body and the new media itself, for he rather compares the subject with telephone, telegraph, and radio. Thus, in contrast to Guyau who describes a brain referring to phonograph as the model, Bergson explains it with the communication media model. The purpose of this thesis is to clarify the similarities and differences between the two theories or analogies that compare the subject with electric media. What both of them attempt to explain with electric media model is the problem of the relation between perception and memory. While Guyau's recording media model sees the function of the brain as storage and playback, Bergson assumes that the brain functions as connection and selection means. The three communication media may express its diverse aspects in the relation between perception and memory.

**東京藝術大學
美術學部
論叢**

**JOURNAL OF
THE FACULTY OF
FINE ARTS
TOKYO UNIVERSITY OF
THE ARTS**

第7号

**平成23年3月
MARCH 2011**

**東京藝術大学美術学部
THE FACULTY OF
FINE ARTS,
TOKYO UNIVERSITY OF
THE ARTS**